

# 日本的自殺形態としての親子心中の社会学的一考察

加 納 昭

## はじめに

小論の目的は、親子心中の社会学的な分析を通して、その実態を明らかにするとともに、一般にいわれているところの「母子一体化」の成立要因などについて考えてゆくことにある。そして、その基礎資料としたものは、昭和四〇年一月から昭和六〇年六月までの『朝日新聞縮刷版』の新聞記事である。その集計数は、一一〇八件、三二九四人であった。

新聞記事には網羅性、信頼性、また家族構成がわからないなどの問題点がある。しかし、このように多数のケースについて自由に分析を加えることができる資料は他にない。官庁統計のような単純集計では、わからないことをこれによって明らかにしたい。

## 1 親子心中の季節変動（略）

## 2 親子心中の年次推移

親子心中の発生件数は、一般に増加傾向にあるように思われがちだが実際は、むしろ減少傾向にあると考えた方がよさそうである。私の集計結果では、昭和五〇年は八〇件、昭和五三年は八一件と多いが、以後少なくなり昭和五九年では四八件、昭和六十年上半期だけでは一件しか報道されていない。また、越永重四郎らによる東京都監察医務院の死体検案調書をロー・データとした親子心中の分析を見ても長期的に減少傾向を示している。<sup>(1)</sup>このように親子心中の件数自体は増

図1 原因別年次推移

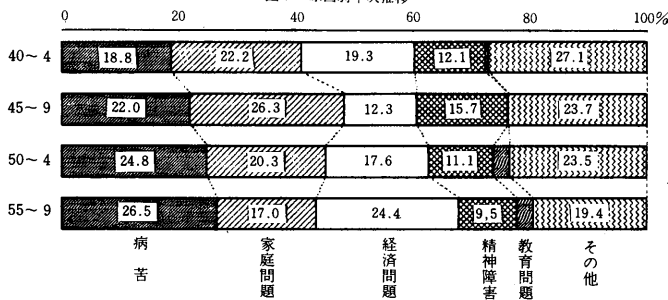
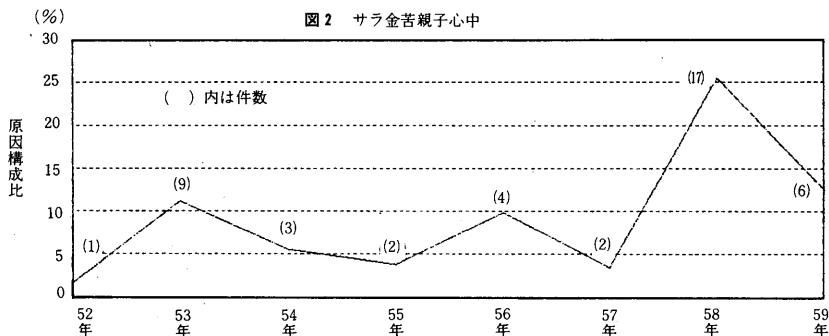


図2 サラ金苦親子心中



加していないといえよう。しかし、その内容については大きな変化がある。そこで、まず原因別の時間的推移をみて、それぞれの原因について考えてみよう。

親子心中の原因構成比を五年を一単位として追ってゆくと図1のようになった。増加傾向にあるのは、病苦・経済問題・教育問題であり、減少傾向にあるのは家庭問題である。

経済問題は、昭和四〇年の不況期に四〇・〇%という高い数値を示しているほかは、一貫して増加している。因みに昭和四〇年の経済問題の内訳は、家業や会社の経営不振・倒産などが九件、夫のギャンブルなどによる生活苦・借金返済苦三件、その他六件である。また、昭和四〇年代は、生活苦などの貧困型でもよぶべきものが多いが、昭和五〇年代になると、夫がギャンブルにこり借金を重ねるといった浪費型が目立ってくる。さらに、昭和五二年以降には、サラ金苦を原因とした親子心中が新聞紙上に現れてくる。そこで、そのサラ金苦による親子心中の推移を調べてみた。それによると、昭和五八年に一七件、二五・四%という高い数値を示すが、以後鎮静化している。もちろん、新聞記事が減ったことをもって直ちに「サラ金地獄」が減っていると考えるのは危険である。しかし、強引な取り立てなどに対する批判や、同年の貸金業規制二法の施行などにより、悪質業者の淘汰が進んだことがサ

ラ金苦による親子心中を少なくしていると考えられる。

家庭問題は、嫁と姑との不和や、夫婦喧嘩、配偶者の浮気・家出などに絶望したものである。しかし、夫婦不和を初めとする家庭問題の裏には、生活苦などの経済問題が絡んでいる場合が多い。原因分類においては、複数の原因も認めたのであるが、その複数原因の組合せの中で一番多い組合せは、経済問題と家庭問題であったことから、それがうかがえるであろう。

### 3 親子心中の年齢分析（略）

### 4 親子心中の形態分析

親子心中の形態は、父母子心中・父子心中・母子心中のいずれかに分類し、親子以外のものは成員に含めないことにした。一家心中ではなく、父母子心中という用語を使った理由はそこにある。三世代にわたる親子心中の場合、孫か祖父母いずれか、より付随的な方を成員に含めず、純粹に親子だけを取り出して分類した。なお、地域とは発生地域ではなく居住地域である。大都市とは、政令指定都市と東京都特別区である。このようにして、地域別の形態構成比を表わしてみる

表1 親子心中の地域別形態構成比（昭和55～59年）

地域 形態	大都市	中小都市	郡 部	全 体
父母子心中	22.2	39.1	52.6	35.6
父 子心中	20.0	9.4	10.5	13.1
母 子心中	57.8	51.4	36.8	51.3
計	100.0	100.0	100.0	100.0

「母子一体化」が社会的要因からも影響をうけていることをしめす。つまり、都市の社会構造、住宅環境、核家族化などが「母子一体化」を助長していると考えられる。

次に、形態別に原因の特徴をみてる（表2）。すると、子の心身障害や病気を苦にして心中するのは、母親に多いことがわかる。また、親が自分の病気を苦にして子供を道連れに心中するケースも母親に多い。さらに、子供の非行や、登校拒否、学業不振、進学問題等を苦にした教育問題も母子心中が多くなって

と表1のようになった。それによると、母子心中は大都市に多く、父母子心中は郡部に多いことがわかる。日本では、親子心中が多く、なかでも母子心中という形態が最も多く、「母子一体化」「母子癒着」といわれる所以である。そして、「母子一体化」は日本の文化的特性に起因するものであると考えられている。しかし、それを地域分類すれば、右に述べたように、都市部、なかでも大都市には母子心中が多いが、郡部では比較的少ないのである。これは、

表2 一般自殺と親子心中の形態別原因構成比(昭和55~59年)

原因	形態	親子心中			親子心中 全 体	一般自殺
		父 母 子	父 子	母 子		
病 苦		18.9	22.9	35.8	28.0	42.8
	親 子	11.6	17.1	19.7	16.4	---
		7.4	14.2	18.2	13.8	---
家 庭 問 題	経 済 問 題	16.8	31.4	14.6	17.9	11.0
	サ ラ 金	46.3	28.6	10.9	25.7	11.2
精 神 障 害		20.0	14.2	5.1	11.6	---
		1.1	2.9	19.0	10.4	16.1
育 児 ノ イ ロ ー ゼ	教 育 問 題	—	—	8.6	4.5	---
	教 育 問 題	1.1	—	5.1	3.0	1.2
教 育 問 題	男 女 関 係	---	---	---	---	4.5
	勤 務 問 題	---	---	---	---	4.2
そ の 他 詳		6.3	5.7	10.9	8.6	5.4
		13.7	17.1	9.5	11.9	3.7

(出所) 一般自殺は警察庁『警察白書』昭和58年版、p.118。

(注) 複数原因の場合があるので合計は100%をこえる。

いる。なお、当然ではあるが、育児ノイローゼは、すべてが母子心中であった。これらのことが、一般にいわれているところの「母子一体化」によるものであるといえよう。また、母子心中には精神障害が多い。これは育児ノイローゼが大半であるが、その他にも産後の肥立ちが悪いのを苦にノイロー

ゼになるなど、育児・出産の影響している場合が多い。

一方、経済問題・サラ金苦の場合は、圧倒的に父子心中（一家心中）という形態をとる場合が多い。経済問題は、直接一家全体にかかわる問題であるためである。なお、形態別原因構成比の年次推移をとってみても、父子心中や父子心中では、経済問題が年々増加傾向にあるにもかかわらず、母子心中では、横ばいである。母子心中の成立に経済要因はあまり、影響を与えていないとみてよい。

以上のことを、一般自殺とも比較してみると次のようなことがいえるであろう。まず、個人的な危機である病苦の場合は単独自殺が一番多く、次に父子・母子心中であり、父子心中といった大型の自殺形態は少ない。逆に集団（家族）的危機の典型である経済問題では、父子心中という自殺形態が卓越する。その次に父子・母子心中が多く、単独自殺は少ない。つまり、換言すれば、病苦からはじまり精神障害、育児、教育、家庭問題、経済問題と危機場面が集団（家族）化すればするほど、単独自殺から、父子・母子心中、父子心中へと自殺形態が大型化するのである。

# 5 親子心中の地域分析

表3 親子心中の地域別原因構成比(昭和55～59年)

地域		大都市	中小都市	郡部	全体
原因					
病 苦 親 子 家 庭 問 題 経 済 問 題 サ ラ 金 精 神 障 害 育 児 ノ イ ロ ー ゼ 教 育 問 題 そ の 他 不 詳	病	30.0	28.1	21.1	28.0
	親	21.1	16.7	5.3	16.4
	子	13.3	13.8	15.8	13.8
	家	15.6	17.3	26.3	17.9
	庭	20.0	27.3	34.2	25.7
	問	7.8	15.1	7.9	11.6
	題	15.6	7.9	7.9	10.4
	サ	10.0	2.2	—	4.5
	ラ	4.4	2.9	—	3.0
	金	12.2	9.4	5.3	8.6
精 神 障 害 育 児 ノ イ ロ ー ゼ 教 育 問 題 そ の 他 不 詳	障	4.4	2.9	10.5	11.9
	害				

(注) 複数原因の場合があるので合計は100%をこえる。

表3は、地域を三区分し、それぞれの原因構成比を算出したものである。それによると、精神障害・育児ノイローゼは圧倒的に大都市に集中している。また、病苦も大都市に多いが、その多くは母親の出産関連である。このように、大都市では母親の出産・育児関連の原因が多いのは、近隣の連帯が薄く、核家族のため祖母等の助言も得にくく、一人育児

表4 特別区の親子心中発生率と自殺率

区	親子心中 (昭和40～59年)		一般自殺 (昭和56年)	
	件数	発生率	人数	自殺率
千代田	2	3.2	8	14.8
中央	—	—	21	25.6
港	8	3.8	36	17.8
新宿	13	3.5	48	14.0
文京	—	—	31	15.5
台東	5	2.4	42	22.8
墨田	8	3.2	29	12.5
江東	12	3.4	55	14.9
品川	12	3.3	64	18.5
目黒	5	1.8	38	13.9
大田	22	3.2	99	15.0
世田谷	27	3.3	135	16.9
渋谷	5	1.9	35	14.3
中野	7	1.9	55	16.0
杉並	16	2.9	83	15.3
豊島	16	5.0	44	15.4
北	14	3.3	57	14.4
荒川	11	5.0	34	17.3
板橋	21	4.2	94	18.8
練馬	14	2.5	89	15.8
足立	33	5.4	107	17.3
葛飾	19	4.3	64	15.3
江戸川	19	4.0	81	16.3
全 体	288	3.3	1,343	16.1

(出所) 自殺人数は、特別区協議会「特別区の統計」昭和57年版 p. 25～26。

に悩む母親が多いためだろうか。また、子供の非行等の教育問題も大都市に多い。また、これらの年次推移をみても、大都市で育児ノイローゼ・教育問題が一貫して増加傾向にある。逆に郡部では、経済問題・家庭問題が主流である。

次に、東京都特別区内の親子心中発生率を算出し、自殺死亡率との比較検討を試みた。ここで、親子心中発生率とは、昭和四〇年～昭和五九年までの二〇年間の発生件数を便宜上、中間の年である昭和五〇年の人口で割り、対一〇万人の発生率を算出したものである。つまり、二〇年間全体を一まとめに発生率を算出しているので、かなり大雑把の感は免れない

が、傾向はつかめるであろう。それによると、親子心中発生率の高い区は、足立・豊島・荒川・葛飾・板橋など北部の周辺地域で中心部は低い。一方、自殺率の高い区は中央・台東などであり、相関関係はみられない。

## 6 子主導型親子心中

「心中」という言葉には、合意性の語感がある。しかし、親子心中の八〇%以上が無理心中であるという現実をみれば、親子心中は、あくまでも殺人と自殺の複合されたものである<sup>(2)</sup>と考えねばならないであろう。このような点から「親子心中」という言葉に疑問をなげかける人も少なくない。たとえば、スチュワート・ピッケンは、「子殺しは犯罪である。けれども日本の新聞は、『無理心中』というような言葉を使って、その道德的問題を回避している。その表現には、実際は殺人であるものを自殺に見せかける効果がある」と痛烈に批判している。また、飯塚進は、「心中」の本来の意味は男女の「情死」であるから、「親子心中」は「道連れ自殺」と呼ぶべきであるとしている。佐々木保行も同様の指摘をしている<sup>(4)</sup>。

このように親子心中が殺人であることは、親と子の死亡率<sup>(5)</sup>の違いからみてもわかるのであり、次にそれをあげよう。

表5 親子心中と一般自殺の手段構成比

		服毒	ガス	排ガス	絞首	入水	銃器	刺器	飛降り	飛込み	焼身	感電	自動車	その他	計
一般自殺	昭和57年	7.7	11.3	6.9	53.9	7.4	0.4	2.5	6.5	4.8	3.7	1.4	—	0.4	100.0
	修正値	6.5	11.3	6.6	50.5	6.5	0.4	2.4	6.1	4.7	4.0	0.9	—	0.3	100.0
親子心中	昭和'50後期	1.6	18.3	13.6	22.5	7.8	2.7	11.0	4.3	6.1	13.3	—	9.5	2.6	100.0
	'50前期	2.7	11.9	11.0	20.5	8.2	2.3	9.2	4.3	8.5	14.2	0.1	4.0	3.1	100.0
	'40後期	5.9	24.3	5.5	13.9	10.3	0.9	10.0	3.1	11.5	8.7	—	2.4	3.2	100.0
	'40前期	10.6	25.4	—	13.6	14.3	1.9	10.6	0.2	12.2	7.8	—	—	3.4	100.0

(出所) 一般自殺は、厚生省大臣官房統計情報部編『自殺死亡統計—人口動態統計特殊報告』昭和59年。pp.28~47。

まず、通常の親子心中である親主導型(子殺し+親自殺)の場合、親の死亡率は七七・九%であるのに対し、子供のそれは八七・二%におよぶ。子供の方が成人より生物的に弱いという点を考慮しても、「子供は殺したが親自身は自殺しそなかった」というケースが、いかに多いかがわかる。逆に子主導型(親殺し+子自殺)の場合は、親が九二・九%という高率であるのに、子供は七五・五%しかない。「親は殺したが自分は自殺しそなかった」のである。

では次に、子主導型の親子心中について考えてみよう。子主導型は、昭和四〇年代前期七件、三・六%。同後期七

件、二・四％。昭和五〇年代前期九件、二・六％。同後期一二件、四・五％。合計三五件、三・二％であった。このように子主導型は増加傾向にあると考えられる。これは、親子心中が高年齢化していることと関連があらう。子主導型の平均年齢は親六八・五歳、子供四〇・〇歳であり、高年齢層がしめている。

また原因を調べてみると子主導型は親主導型に比べて親の病気を苦にしたものが多い。

## 7 手段の意味

表6 親子心中の型別原因構成比  
(昭和40～59年)

原因	型	子主導	親主導	全体
病	苦	25.7	24.7	24.7
		25.7	13.8	14.2
		2.9	12.3	12.0
家庭問題	親子	22.9	22.6	22.6
		22.9	19.1	19.2
経済問題	サラ金	2.9	4.0	4.0
		8.6	13.0	12.9
精神障害	育兒ノイローゼ		4.1	4.0
			1.8	1.7
教育問題	その他	14.3	8.9	9.1
		8.6	15.7	15.5

(注) 複数原因の場合があるので合計は100％をこえる。

手段分類においては、複数の手段はみとめなかった。つまり、死因となった手段(未遂の場合は最も重要な手段)によって分類した。なお、親子心中の手段を一般自殺のそれと比較するために、表6にその数値をあげた。しかし、この生の数値のままでは比較するのは適当ではない。なぜならば、自殺の手段は、年齢や性の違いによって特徴があるためである。たとえば、若年層では絞首は四割程度を占めるにすぎないが、高齢者のそれは七割をこえることなどである。そこで、一般自殺と親子心中の性別年齢分布の違いによる差を修正する必要がある。それをおこなったのが下段の修正値である。

それによると、一般自殺の場合は 絞首が半数以上を占めるのにくらべて、親子心中の場合は、二割程度しかない。逆に、ガス・排ガス・焼身(家や自動車にガソリン等をまいて放火するケースが大半)など、一諸に死ねる手段が親子心中では多く用いられていることがよみとれる。なお、刺器も一般自殺に比べて多いが、これは無理心中が多いためであらう。さらに親子心中に特徴的なことは、自動車ごとコンクリート壁に激突、あるいは谷へ転落、海へ飛び込みなどの自動車を利用したケースが目立つことである。これも先に述べたように、親子一諸に死ぬために密室性の高い手段・場所が選ばれているのである。

このように、親子心中の手段・方法・場所にも隠された意味がある。特異な例では、手をにぎりあってガス心中、ひもでくくりあって入水する場合がある。さらには家で飼っている犬や猫まで一諸に殺してから心中するケースもあった。

次に、手段の時間的推移を調べてみると表6の下の段のようになった。排ガスや自動車を利用した親子心中は、一貫して増加しているが、これは自動車の普及によるものであろう。服毒は逆に急激な減少を示しているが、その理由は不明。

### おわりに

前述の形態分析において、「母子一体化」の社会的要因として住宅環境や核家族化などをあげたが、他に家事や育児のはほとんどすべてが母親に負わされていることや、父親不在の問題がある。さらには、子供は親の所有物であるという日本の伝統的な観念、子供への過剰な期待なども問題としなければならぬ。

また、最後になってしまったが、「母子一体化」という言葉自体についての疑問も提示しておきたい。それは、それぞれの母子心中のケースを検討してみると、たしかに母親と子供が同じ問題に悩み心中に到るケース（合意心中）もみられ

る。だが、ほとんどは物心もつかないたいけな乳幼児を殺し、自分も自殺するという無理心中である。つまり、そこにあるのは、母子の相互的一体化の図式ではなく、一方的・片想いのな一体化のそれである。子供は心中を望んでいない。よく遺書にある、「この子を遺してゆくのは不憫で……」といった言葉は欺瞞ではないか。あくまでも心中の主体は親にあるのに、それを子供がかわいそうといった言葉で道徳的責任を軽減する意図がある。このように、行為主体としての親の責任を子に一部転嫁し、またそれを許容する社会構造というのは、まさに土居健郎のいう「甘え」という鍵概念が適切にいい得ているところのそれであると感ずるのである。

### 註

- (1) 越永重四郎・高橋重宏・島村忠義「戦後における親子心中の実態」『厚生指標』第二二巻一三三号、財団法人厚生統計協会、昭和五〇年、一一頁。
- (2) 警察庁刑事局編『犯罪統計書』昭和三二―三八年。
- (3) Picken, S. Suicide: Japan and the West-A Comparative Study. 掘たお子訳『日本人の自殺』サイマル出版会、昭和五四年、一八二頁。



(4) 飯塚進「心身障害者に係わる『道連れ自殺』について(I)」

桃山学院大学社会学会編『桃山学院大学社会学論集』七卷二  
号、昭和四八年、一三八—一三九頁。

(5) 佐々木保行「産褥期の母親と育児ノイローゼ」佐々木保行・

高野陽・大日向雅美・神馬由貴子・芹沢茂登子著『育児ノイ  
ローゼ』有斐閣、昭和五七年、四頁。